

サクラ（オオシマザクラ）の古木調査

鎌倉広町緑地「オオシマザクラの巨木」診断目次

- 1、位置図
- 2、診断の概要
- 3、はじめに
- 4、診断の目的
- 5、診断の方法
- 6、診断の結果
 - 6-1「概況診断」
 - 6-2「外観診断」
 - 6-5「腐朽部精密診断」
 - 6-5「土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験」
- 7、調査・診断のまとめ

1、位置図



図-1 広町緑地の位置 1:7500

2、診断の概要

長い歴史を持つ鎌倉の、広町緑地の尾根上に生育する推定樹齢 200 年程のオオシマザクラは、最近、一部の枝に枯れ下がりが見られるなど衰退が見られるため、樹木の健康診断をの依頼を受け、樹木医の有賀一郎・安部鉄雄で調査したものである。

- | | |
|--------|---|
| 依頼者名 | : 鎌倉市 |
| 名木古木名 | : オオシマザクラ巨木 |
| 樹木医名 | : 有賀一郎 No.396 診断協力：安部鉄雄 No.798 |
| 依頼内容 | : 尾根上オオシマザクラの活力が落ちてきているようだが、枯れ下がり・腐朽・その他衰退などについて健康診断を依頼したい |
| 診断日 | : 平成 16 年 10 月 13 日、
とりまとめ、10 月 14 日～10 月 30 日 |
| 生育地の環境 | : 樹林内尾根上・北傾斜 15 度程度。
根元周囲は長年踏み固められ、上側は広場状で無植生。
極最近ロープ柵を設置。
横を遊歩道が通る。 |
| 形状寸法 | : 樹高 : 約 6 メートル、
8 本株立ち : ①105 cm、②枯れ 120、③180、④120、⑤180、
⑥切断 85、⑦枯れ 57、⑧220、
根元周：根元高 20 cm の周囲長 : 5.4 メートル
枝張り : 東 10M、西 10M、北 10M、南 8M、 |
| 推定樹齢 | : 約 200 年 |

3、はじめに

最近、環境共生や地球温暖化などの問題やヒートアイランドなど、都市林や都市樹木の重要性に対する認識が高まっている。急速な都市化、都市の局地的温暖化現象の進行、生物多様性の回復・緩和などのため、自然の再生や樹木・樹林の育成に大きな期待が寄せられている。そして屋上や壁面などを含め可能な限り緑で地表を覆い自然度を高めることも要請されている。また長生きした大きな樹木・巨木は優秀な遺伝子を受け継いでいるものと考えられており、その子孫を残すことも重要とされる。

一方、人と一緒に長い間暮らしてきた大きな都市の巨木は、過酷な生育環境により衰退や損傷が年々目立つものが多い。高度成長期に植えられた多くの都市樹木も大きく生育し地域の人に大切にされているが、県内においても最近街路樹の倒木で人身事故が起きるなど問題も発生させている。特に大切にしなければならない古木名木など都市内の大きな樹木は衰退しているものが数多く見られ、倒木の危険性を内在させているものもある。最近では奈良の室生寺の杉古木が倒れ重要文化財の五重塔を壊したのは記憶に新しい。

樹木の個体保全のためには、根や大枝を傷付けることのないように樹木をできるだけ大きく健全に育成することが求められている。大きく安全な樹木を育てる為には、生育するためのスペースが必要である。しかし都市には自由に樹木が育つ土地はほとんどなく、大きな空間を持つ社寺境内や学校、公園・緑地などが注目されている。このように近年の環境保全推進の強い動き中で、ふるさとの樹木や自然を保全・再生することと同時に、樹木転倒の安全性や危険木除去なども問題視され始めている。

それまで健全に生育していた樹木でも、維持管理や工事などのほか人の踏圧による締め固めなどの損傷を原因として、腐朽菌が進入し、強度を落とし倒木の危険が発生する。大きく傷ついた樹木や腐朽などで支持力を失った樹木は、立っていること自身が危険なため、傷んだ樹木の処置や危険部位の除去が必要であり、そのための診断は欠かせなくなっている。

広町緑地のオオシマザクラ巨木は、長年この地に生育してきた。おそらく薪炭材を得るため植えられたものと思われる。長年伐採を繰り返してきたため株立ち状になっている。周囲の森林も管理を行わなくなり成長し、競争が激化し、倒木なども見られる。オオシマザクラ巨木自身も競争の中におり、枯枝や腐朽が見られ診断が必要な状況にある。

4、診断の目的

今回診断の目的は、樹木の健康診断として、本オオシマザクラ巨木の樹勢衰退の原因の確認と、落枝・枝折れ・倒木などの危険判定を行い、どの程度の傷害を樹木（オオシマザクラ）が今までに受けたのかを把握することで、その樹勢回復の処方を検討することにある。

このオオシマザクラはこの場所に長年生育してきた歴史の生き証人として、利用者に親しまれており、貴重な巨木であることから、樹木の活力の衰退、幹や根系の腐朽などを含む総合的な樹木の健康状態を把握し、問題を早期発見し、適切な処置を施すことで、利用者に対して安全確保を行うものである。又、今後の樹勢回復・維持管理などの検討材料に資するものでもある。

5、診断の方法

この樹木診断は、いわば樹木の健康診断にあたり、樹木生理学的な樹勢衰退原因特定や、物理学的な倒木危険度判定を行うものである。

樹木生理上の樹勢衰退は、総合的な外観診断や土壌根系診断で確認し、物理的な危険度判定は、根元・幹・枝が腐朽して倒木や落枝の恐れがないかを調べることで、樹木の健全度を判定するものである。

通常診断は、観察・木槌打診・鋼棒貫入などによる外観診断(簡易診断)と、レジストグラフ(貫入抵抗値測定器)を用いる精密診断によって行われる。

今回、樹木診断は「概況診断」「外観診断」「土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験」「レジストグラフによる精密診断」を行い、総合的に樹木の健全度を判定し、必要な処置、対応策を提示する一連の作業とした。

「概況診断」

樹木の生育地の総合的な環境や立地、歴史、文化的な価値などヒアリング・資料調査などで、総合的に把握する。

「外観診断」

通常は、外観診断により、目視による観察と簡易な道具類によって、樹木の外観に現れた状況から健康状態をカルテに記入することで総合的な診断をする。

【使用機器：鋼棒・根堀り・木槌・ナイフ・メジャー・外観カルテ等】

「腐朽部精密診断」

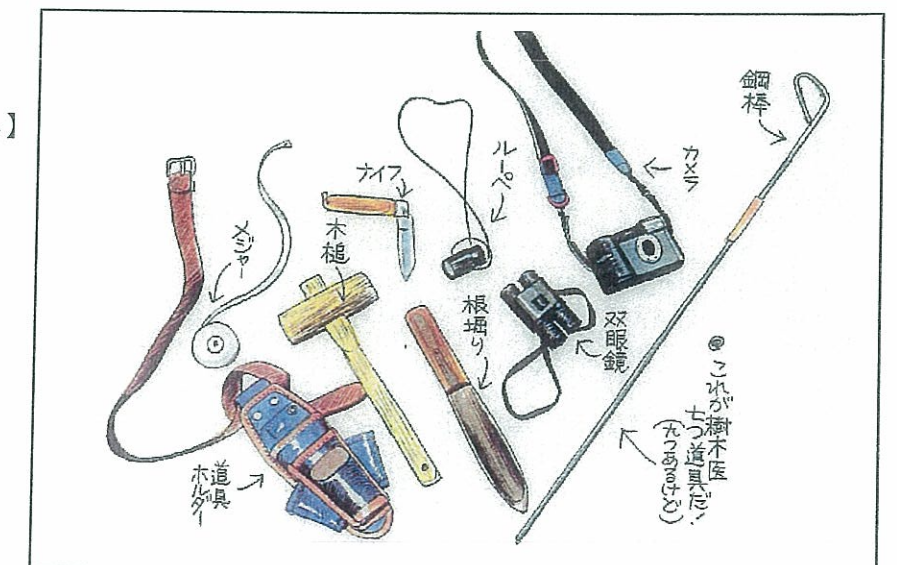
レジストグラフを使用し樹体内の貫入抵抗測定で腐朽の状態を確認する。

【使用機器：レジストグラフ】

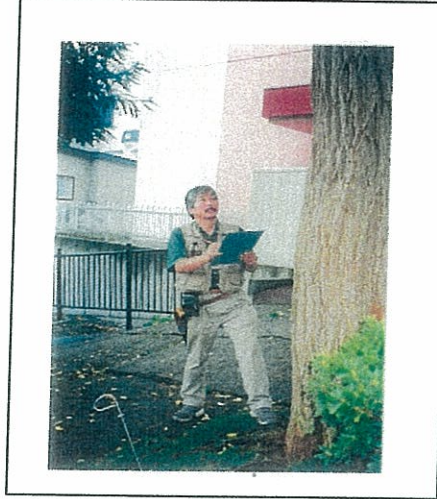
「土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験」

鋼棒を一定の重さのハンマーで土中に貫入させ土壌硬度を調べるもの。

【外観診断の七つ道具】



樹木診断の標準作業：外観診断・精密診断・樹上診断・土壌掘削診断
 ・土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験（今回の作業写真ではないものも含む）



【外観診断：目視・カルテ作成】 【外観診断：幹周り根元周り測定】



【 外観診断：木槌打診】 【 外観診断：鋼棒貫入】



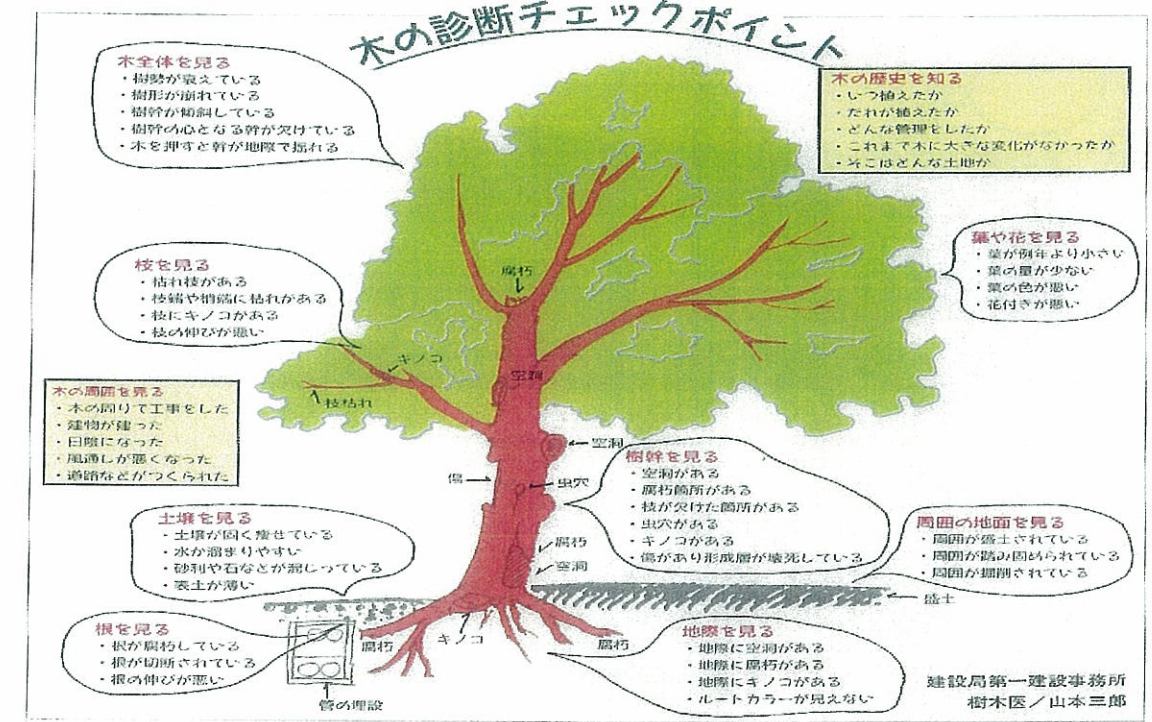
【外観診断：根元掘削】



【精密診断：レジストグラフ測定】



【土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験】



【 診断のチェックポイント】

6、診断の結果

6-1 「概況診断」

三浦半島やそれに連なる鎌倉地域の急峻な丘陵部では、薪炭林・鑑賞林として尾根上にオオシマザクラが植林されているのは一般的である。オオシマザクラは本来伊豆大島や伊豆半島に自然分布し、この地域には移入されたものである。ほとんどさほど旧くない時代に持ち込まれたものと思われるが、実生の苗木を繰り返し植えているためか在来種で近縁のヤマザクラとの交雑が進んでいるようにも思われる。三浦半島や鎌倉地域の地形は急峻なため、管理しやすい平坦な尾根上に植えたとも考えられる。

広町緑地のサクラ林も尾根の上に成立し、ヤマザクラとオオシマザクラが混成しているため同様の経過で植えられたものと思われる。オオシマザクラとヤマザクラはおおむね薪炭林の特徴である株立ち状を呈し、高木層を優先種となっている。亜高木層から草本層はヤブツバキクラス域のスタジイ・タブノキ・モチノキなど常緑の樹木が生育し、サクラ林の周りのヤブコウジ・スタジイ群集の種と共通する。尾根上の散策路にあるため現在は観賞用として鎌倉山のサクラと共に地域の人に親しまれており、広町緑地の景観的特徴となっている。

これらのサクラ類の中で、広町緑地で最も大きな樹木が、このオオシマザクラ巨木である。他のサクラと同様に薪炭林としての管理がなされなくなったため、下から生育してきている常緑樹やその他の隣接する生育の早い樹種との競合が見られるようになっている。周囲の樹木も同様に大きく成長し、競争が激化し、競争に負けた倒木なども見られる。



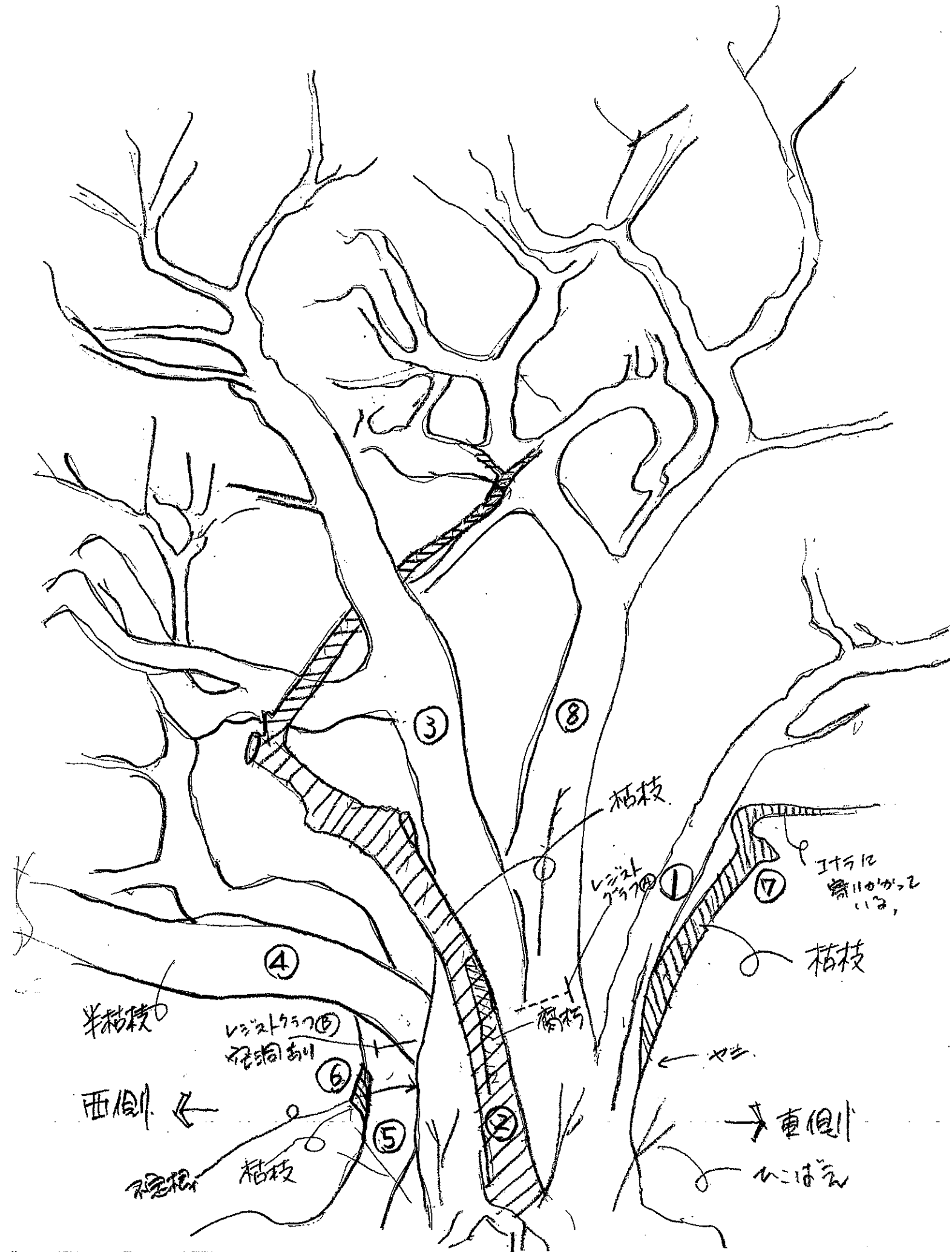
6-2 「外観診断」

外観診断(簡易診断)により、目視による観察と簡易な道具類によって、樹木の外観に現れた状況から健康状態をカルテに記入することで総合的な診断をするもの。最下の大枝下部の幹及び根元周囲の地形・土壌など対象。

- ・株立ちの幹は8本である。
- ・うち1本(⑥)は枯死し、最近剪定削除されている。うち2本(②⑦)は枯死している。⑦は隣接するコナラに寄りかかっている。
- ・うち1本(④)は半枯れ状態で、木槌打診では異常音があり、幹内部に腐朽があるように思われるため精密診断を必要とする。
- ・そのほかの幹はおおむね健全と思われ、最近形成層が活動し樹皮が肥大成長をしている部位も見られる。
- ・腐朽部を調べるたが、鋼棒の貫入する部位は無く、開口空洞や外側の腐朽はない。
- ・枯死部に菌糸塊や幼菌が見られるが、攻撃的な菌ではなく枯死部を分解するもので生立木に危害はないと思われる。また昆虫類の分泌するヤニが見られるが同様に問題ない。
- ・地際のルートカラーはよく発達しており、生育も悪くはない。
- ・④の幹分岐部には不定根が出ており、腐朽があることが想定される。
- ・根元には数本のヒコバエが萌芽しているが問題ない。
- ・現在は枯れた幹は根株内部まで強く腐朽していないように思われるが、今後枯れた幹部から腐朽菌が入り全体的に根株の強度を落とす可能性がある。

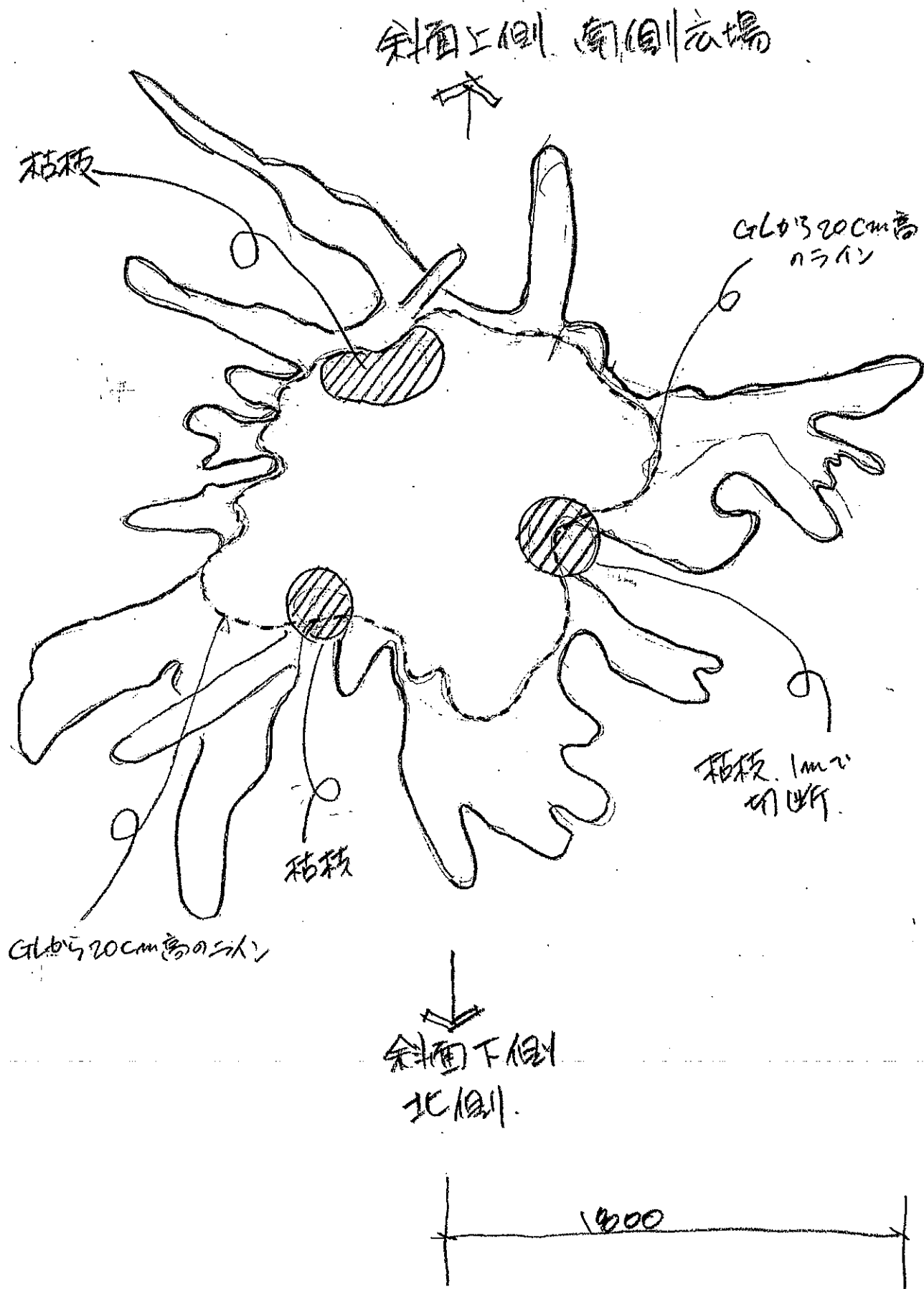
【諸元】

名木古木名 : オオシマザクラ巨木
 生育地の環境 : 樹林内尾根上・北傾斜 15 度程度。
 根元周囲は長年踏み固められ、上側は広場状で無植生。
 極最近ロープ柵を設置。
 横を遊歩道が通る。
 形状寸法 : 樹高 : 約 6 メートル、
 8 本株立ち : ①105 cm、②枯れ 120、③180、④120、⑤180、
 ⑥切断 85、⑦枯れ 57、⑧220、
 根元周 : 根元高 20 cm の周囲長 : 5.4 メートル
 枝張り : 東 10M、西 10M、北 10M、南 8M、
 推定樹齢 : 約 200 年

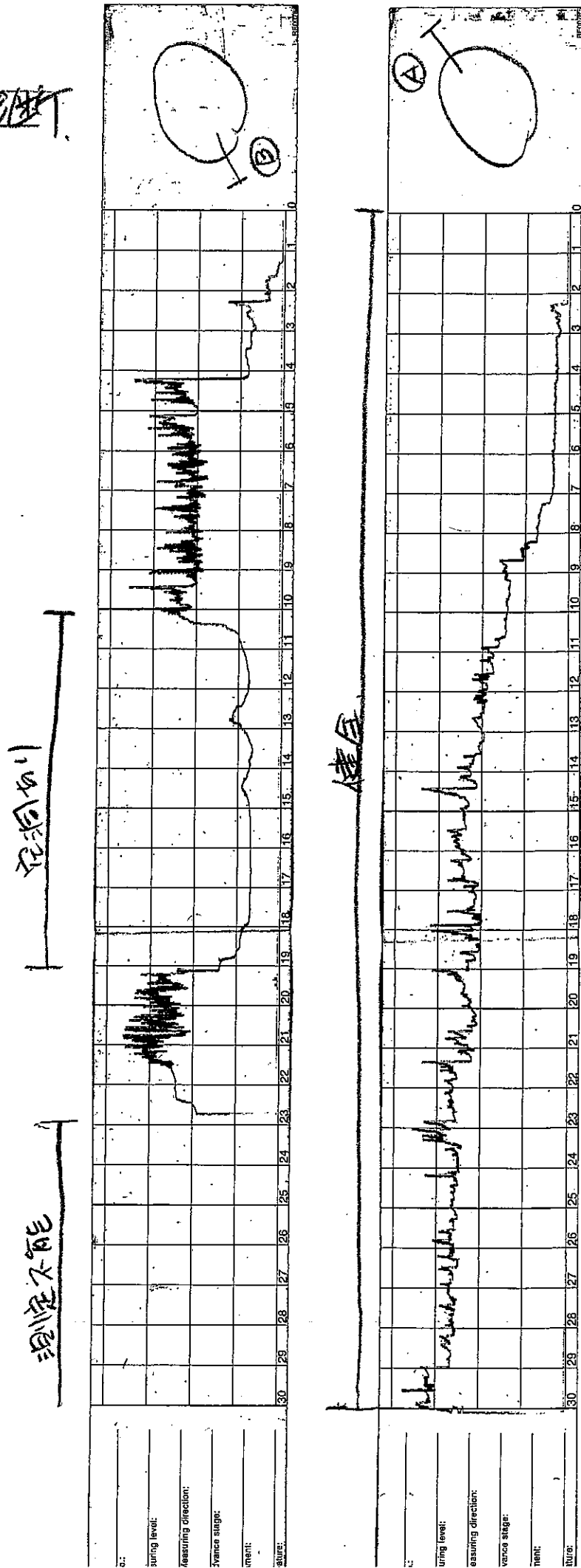


6-5 「腐朽部精密診断」

レジストグラフを使用し樹体内の貫入抵抗測定で腐朽の状態を確認した。
 半枯れ状の④の幹分岐部にて木槌打診で異常音があったため、精密診断を実施した。西側からの貫入では腐朽部が明確であった。東側からは腐朽は計測できなかった。幹にはさまれた状態であるため2方向しかできなかったが、すぐに幹折れするほどに腐朽は進んでないと思われる。



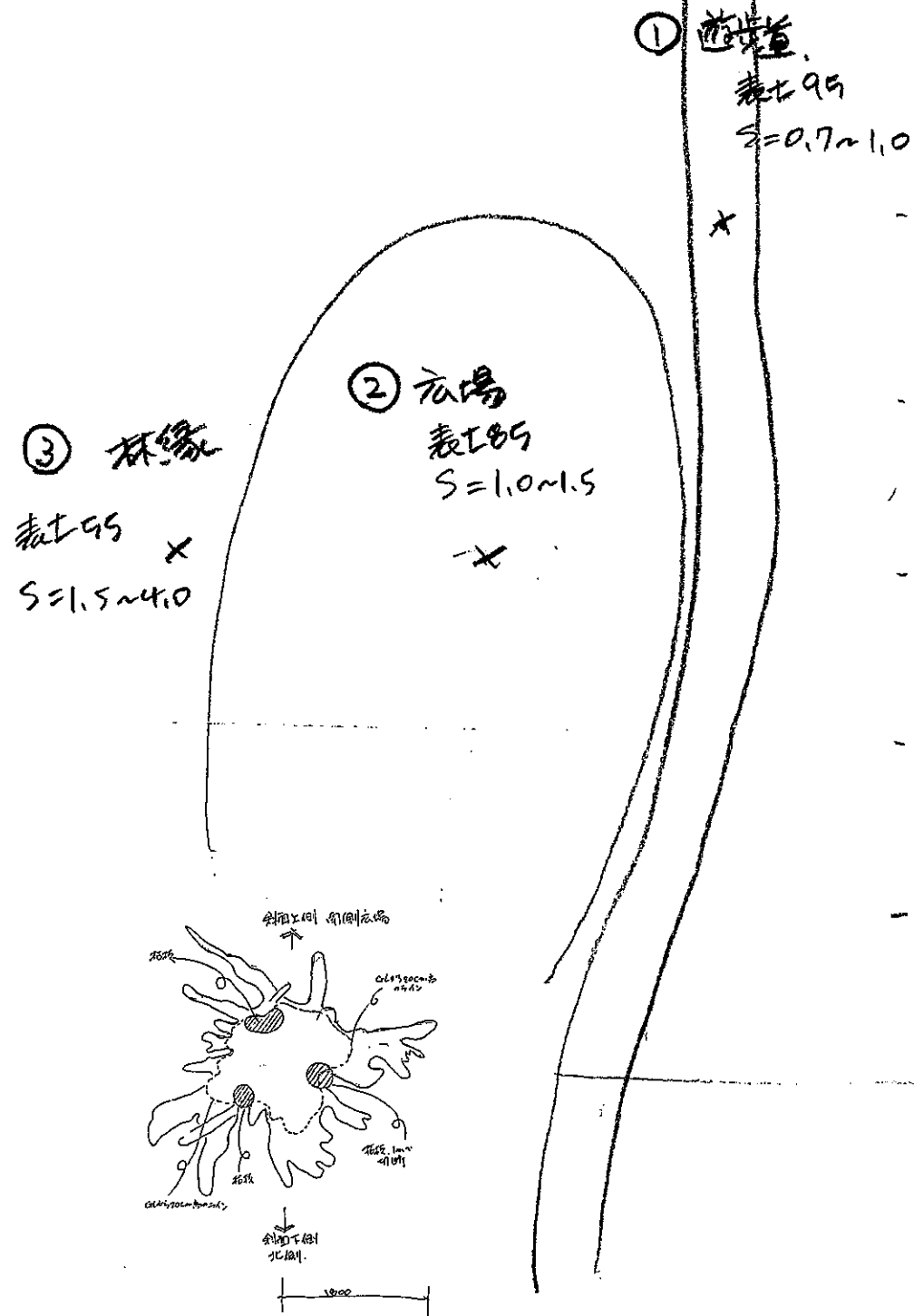
植木部精密調査



6-5 「土壌硬度：長谷川式土壌貫入計試験」

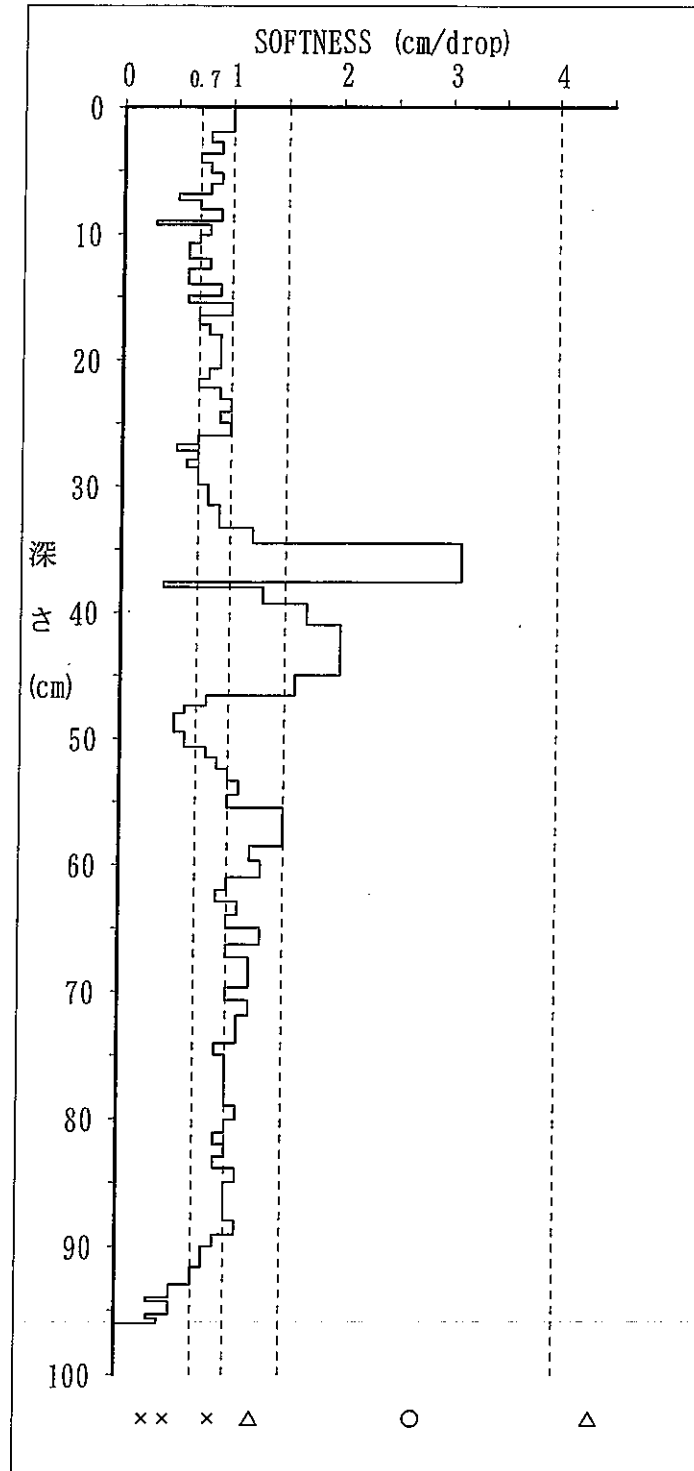
鋼棒を一定の重さのハンマーで土中に貫入させることで、土壌硬度を調査した。
 サクラの南側の広場付近で3箇所で行った。試験位置は概況平面図に示したとおり根元から5から10メートル離れた地点の①踏圧の大きい遊歩道部、②踏圧の中庸の広場部、③踏圧のほとんどない林縁部の3箇所を想定し位置選択した。
 計測では貫入が0.5以下のドタン層（旧地形の基盤：土丹）までを行った。ドタンまでの表土厚は①95センチ、②80センチ、③55センチであった。
 その結果、土壌硬度は3点は明確な差異が計測された。①では広場から遊歩道部に移る狭く部で利用者は必ず通行する場所である。S値0.7から1.0で樹木の根系発達に障害のある硬い状態である。それに比べ③の林縁部は、1.5から4.0で根系の発達に障害のない柔らかな最適な硬度であった。②の広場内は一部に柔らかな層があるもののほとんどが1.0から1.5の根系発達に多少障害のあるしまった状態であった。

土壤貫入計試験地点図



長谷川式土壤貫入試験

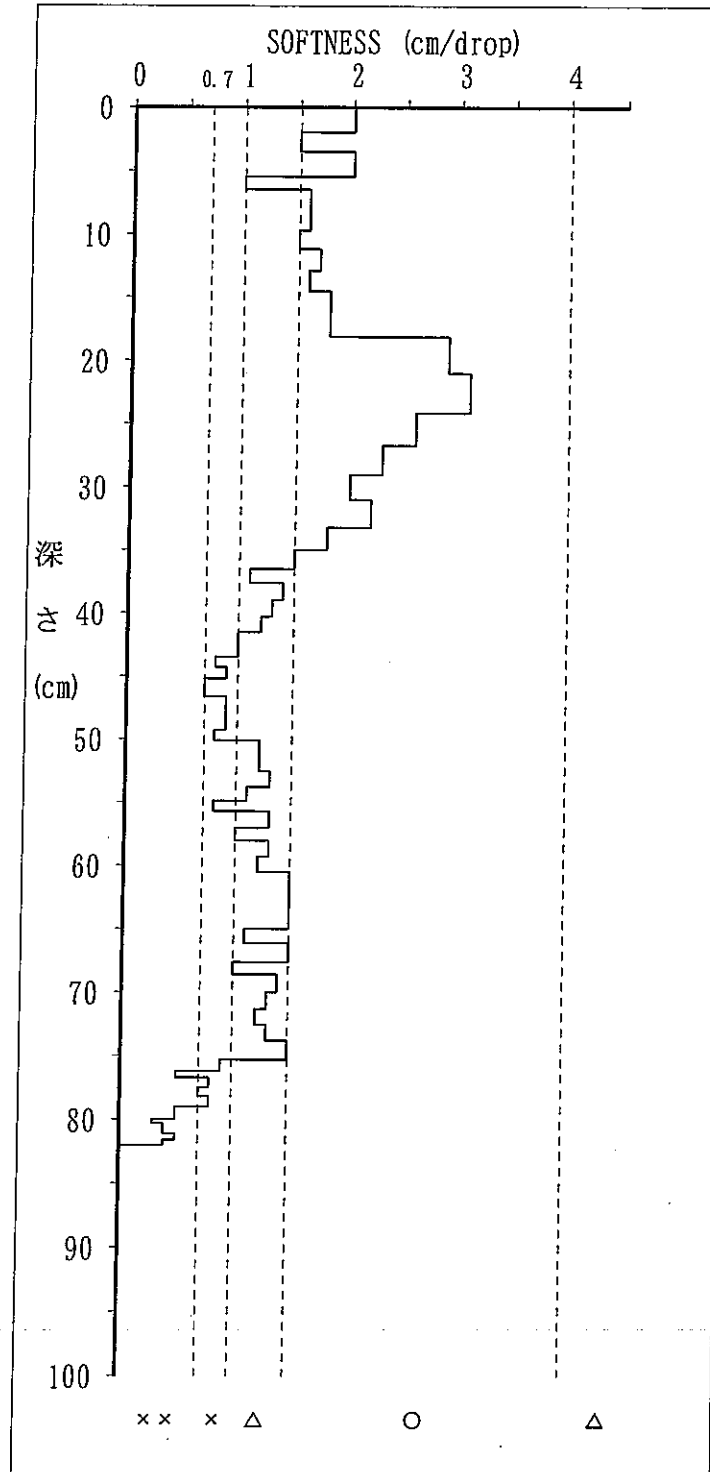
調査名	鎌倉オオシマザクラ10メートル歩道内 ①		
試験者名	有賀・安部	試験年月日	2004年10月13日
試験場所	鎌倉・広町緑地	番号	No. 3
落錘落下高	50cm		



回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)
1	1.0	61	53.4	121		181	
2	2.0	62	54.5	122		182	
3	2.8	63	55.5	123		183	
4	3.7	64	57.0	124		184	
5	4.4	65	58.5	125		185	
6	5.2	66	59.7	126		186	
7	6.1	67	61.0	127		187	
8	6.9	68	62.0	128		188	
9	7.4	69	62.9	129		189	
10	8.1	70	64.0	130		190	
11	9.0	71	65.0	131		191	
12	9.3	72	66.3	132		192	
13	10.1	73	67.3	133		193	
14	10.8	74	68.5	134		194	
15	11.4	75	69.7	135		195	
16	12.0	76	70.7	136		196	
17	12.8	77	71.9	137		197	
18	13.4	78	73.0	138		198	
19	14.0	79	74.1	139		199	
20	14.9	80	75.0	140		200	
21	15.5	81	76.0	141		201	
22	16.5	82	77.0	142		202	
23	17.2	83	78.0	143		203	
24	18.0	84	79.0	144		204	
25	18.9	85	80.1	145		205	
26	19.8	86	81.1	146		206	
27	20.7	87	82.0	147		207	
28	21.5	88	83.0	148		208	
29	22.2	89	83.9	149		209	
30	23.1	90	85.0	150		210	
31	24.1	91	86.0	151		211	
32	25.0	92	87.0	152		212	
33	26.0	93	88.0	153		213	
34	26.7	94	89.1	154		214	
35	27.2	95	90.0	155		215	
36	27.9	96	90.8	156		216	
37	28.5	97	91.6	157		217	
38	29.2	98	92.3	158		218	
39	29.9	99	93.0	159		219	
40	30.7	100	93.5	160		220	
41	31.5	101	94.0	161		221	
42	32.4	102	94.3	162		222	
43	33.3	103	94.8	163		223	
44	34.5	104	95.3	164		224	
45	37.6	105	95.6	165		225	
46	38.0	106	96.0	166		226	
47	39.3	107		167		227	
48	41.0	108		168		228	
49	43.0	109		169		229	
50	45.0	110		170		230	
51	46.6	111		171		231	
52	47.4	112		172		232	
53	48.0	113		173		233	
54	48.5	114		174		234	
55	49.0	115		175		235	
56	49.5	116		176		236	
57	50.1	117		177		237	
58	50.7	118		178		238	
59	51.5	119		179		239	
60	52.4	120		180		240	

長谷川式土壌貫入試験

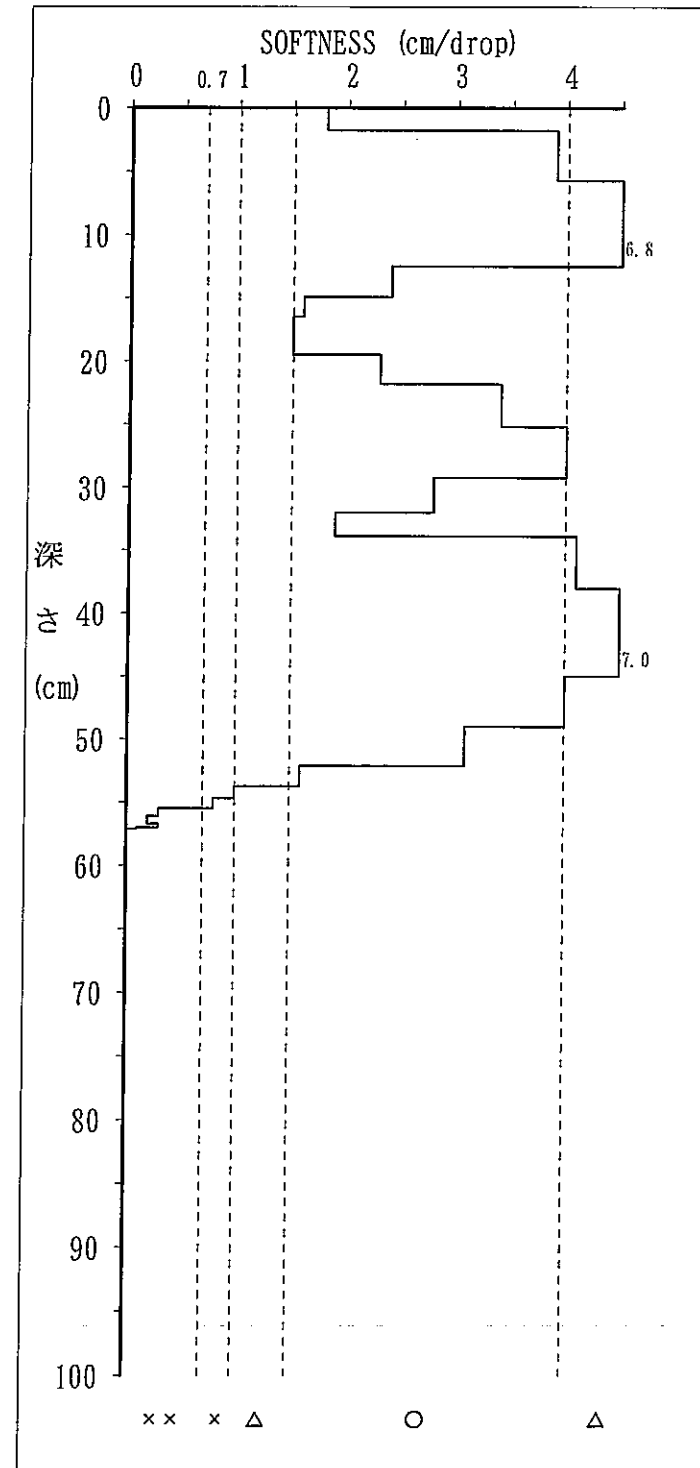
調査名	鎌倉オオシマ広場内 ②		
試験者名	有賀・安部	試験年月日	2004年10月13日
試験場所	鎌倉・広町緑地	番号	No.
落錘落下高	50cm		



回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)
1	2.0	61	80.3	121		181	
2	3.5	62	80.7	122		182	
3	5.5	63	81.1	123		183	
4	6.5	64	81.6	124		184	
5	8.1	65	82.0	125		185	
6	9.7	66		126		186	
7	11.2	67		127		187	
8	12.9	68		128		188	
9	14.5	69		129		189	
10	16.3	70		130		190	
11	18.1	71		131		191	
12	21.0	72		132		192	
13	24.1	73		133		193	
14	26.7	74		134		194	
15	29.0	75		135		195	
16	31.0	76		136		196	
17	32.2	77		137		197	
18	35.0	78		138		198	
19	36.5	79		139		199	
20	37.6	80		140		200	
21	39.0	81		141		201	
22	40.3	82		142		202	
23	41.5	83		143		203	
24	42.5	84		144		204	
25	43.5	85		145		205	
26	44.3	86		146		206	
27	45.2	87		147		207	
28	45.9	88		148		208	
29	46.6	89		149		209	
30	47.5	90		150		210	
31	48.4	91		151		211	
32	49.3	92		152		212	
33	50.1	93		153		213	
34	51.3	94		154		214	
35	52.5	95		155		215	
36	53.8	96		156		216	
37	54.9	97		157		217	
38	55.7	98		158		218	
39	57.0	99		159		219	
40	58.0	100		160		220	
41	59.3	101		161		221	
42	60.5	102		162		222	
43	62.0	103		163		223	
44	63.5	104		164		224	
45	65.0	105		165		225	
46	66.1	106		166		226	
47	67.6	107		167		227	
48	68.6	108		168		228	
49	70.0	109		169		229	
50	71.3	110		170		230	
51	72.5	111		171		231	
52	73.8	112		172		232	
53	75.3	113		173		233	
54	76.2	114		174		234	
55	76.7	115		175		235	
56	77.5	116		176		236	
57	78.2	117		177		237	
58	79.0	118		178		238	
59	79.5	119		179		239	
60	80.0	120		180		240	

長谷川式土壌貫入試験

調査名	鎌倉広町緑地オオシマ林内5メートル ③		
試験者名	有賀・安部	試験年月日	2004年10月13日
試験場所	鎌倉広町緑地	番号	No.
落錘落下高	50cm		



回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)	回数	積算貫入量(cm)
1	1.8	61		121		181	
2	5.7	62		122		182	
3	12.5	63		123		183	
4	14.9	64		124		184	
5	16.5	65		125		185	
6	18.0	66		126		186	
7	19.5	67		127		187	
8	21.8	68		128		188	
9	25.2	69		129		189	
10	29.2	70		130		190	
11	32.0	71		131		191	
12	33.9	72		132		192	
13	38.0	73		133		193	
14	45.0	74		134		194	
15	49.0	75		135		195	
16	52.1	76		136		196	
17	53.7	77		137		197	
18	54.7	78		138		198	
19	55.5	79		139		199	
20	55.8	80		140		200	
21	56.1	81		141		201	
22	56.3	82		142		202	
23	56.5	83		143		203	
24	56.7	84		144		204	
25	57.0	85		145		205	
26	57.1	86		146		206	
27		87		147		207	
28		88		148		208	
29		89		149		209	
30		90		150		210	
31		91		151		211	
32		92		152		212	
33		93		153		213	
34		94		154		214	
35		95		155		215	
36		96		156		216	
37		97		157		217	
38		98		158		218	
39		99		159		219	
40		100		160		220	
41		101		161		221	
42		102		162		222	
43		103		163		223	
44		104		164		224	
45		105		165		225	
46		106		166		226	
47		107		167		227	
48		108		168		228	
49		109		169		229	
50		110		170		230	
51		111		171		231	
52		112		172		232	
53		113		173		233	
54		114		174		234	
55		115		175		235	
56		116		176		236	
57		117		177		237	
58		118		178		238	
59		119		179		239	
60		120		180		240	

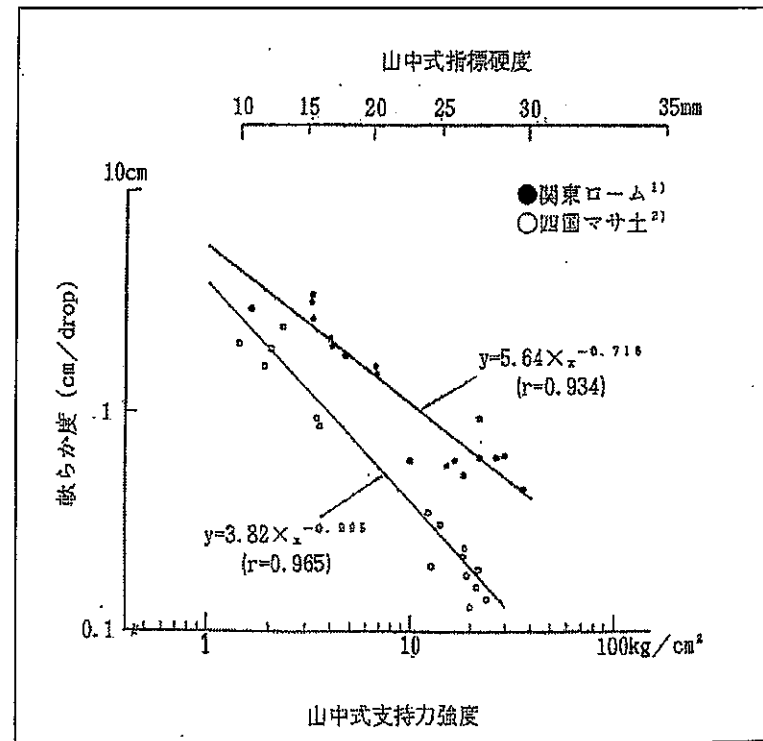
8 基礎データ

1. 長谷川式土壌貫入計の判断基準

段階 (S値) cm/drop	根の進入の可否	軟らかさ (硬さ) の表現	判定
0.7以下	多くの根が進入困難	固結	××
0.7~1.0	根系発達に阻害あり	硬い	×
1.0~1.5	根系発達阻害樹種あり	締まった	△
1.5~4.0	根系発達に阻害なし	軟らか	○
4.0より大	〃 (低支持力, 乾燥)	膨軟すぎ	△

日本造園学会誌 ランドスケープ研究 (Vol.63 No.3 P229)より

2. 長谷川式土壌貫入計と山中式土壌硬度計との相関関係



引用文献

- 1) 長谷川秀三：日本造園学会春期大会発表要旨(1981.5)
- 2) 増田拓朗他：香川大学農学部学術報告(1983.3)

7. 調査・診断のまとめ

三浦半島やそれに連なる鎌倉地域の急峻な丘陵部では、薪炭林・鑑賞林として尾根上にオオシマザクラが植林されてあることが多い。しかしこの地域には自然分布はなく移入されたものである。広町緑地のサクラ林も尾根の上に成立し、ヤマザクラとオオシマザクラが混成し、おおむね薪炭林の特徴である株立ち状を呈し、高木層の優先種となっている。亜高木層から草本層はヤブツバキクラス域のヤブコウジ・スダジイ群集の種と共通する常緑樹を主体とする。

これらのサクラは尾根上の散策路にあるため現在は観賞用として鎌倉山のサクラと共に地域の人に親しまれており、広町緑地の景観的特徴となっている。これらのサクラ類の中で、広町緑地で最も大きな樹木が、このオオシマザクラ巨木である。おそらく50年程前から萌芽更新されていないと思われる。【33年前：1970年の航空写真でも、伐採されていないエリア内に位置している】その後、薪炭林としての管理がなされなくなったため、下から生育してきている常緑樹やその他の隣接する生育の早い樹種との競合が見られる。周囲の樹木も同様に大きく成長し、夫々競争が激化し、競争に負けた倒木なども見られる。オオシマザクラ自らの株立ちの幹の間にも競争があり、生育の悪いものは枯死しているものが見られ、生立しているものは8本から5本になっている。

- 株立ちの幹は8本である。
- うち1本(⑥)は枯死し、最近剪定削除されている。うち2本(②⑦)は枯死している。⑦は隣接するコナラに寄りかかっている。
- うち1本(④)は半枯れ状態で、木槌打診では異常音があり、幹内部に腐朽があるように思われるため、精密診断を実施した。
精密診断ではレジストグラフを使用し樹体内の貫入抵抗測定で、腐朽の状態を確認した。西側からの貫入では幅10センチほどの腐朽部が明確であった。東側からは腐朽は計測できなかった。幹にはさまれた状態であるため2方向の測定しかできなかったが、すぐに幹折れするほどに腐朽は進んでないと思われる。
- 2方向の幹に挟まれ締め殺しも受けているように思われ、将来枯死すると思われる。
- ④の幹分岐部には自らの回復努力と考えられる不定根が出ており、この点からも腐朽があることが想定される。
- そのほかの生立する幹はおおむね健全と思われ、最近形成層が活発に活動し樹皮が肥大成長をしている部位も見られる。これらの局所的な肥大は不健全部分の補強であり、根株内部には腐朽もあるだろう。
- 外部から腐朽部を調べるたが、鋼棒の貫入する部位は無く、開口空洞や外側の腐朽はない。
- 枯死部に菌糸塊や幼菌が見られるが、攻撃的な菌ではなく枯死部を分解するもので生立木に危害はないと思われる。また昆虫類の分泌するヤニが見られるが枯死部を分解するもので同様に問題ない。
- 地際のルートカラーはよく発達しており、生育も悪くはない。
- 根元には数本のヒコバエが萌芽しているが問題ない。
- 現在は枯れた幹は根株内部まで強く腐朽していないように思われるが、腐朽部はつながっており、今後枯れた幹部から腐朽菌が入り全体的に根株の強度を落とす可能性がある。 観察の継続が望まれる。

踏圧の影響を受けているかどうかを調べるため、長谷川式土壌貫入計試験機を使用し土壌硬度をサクラの南側の広場付近で測定した。試験位置は踏圧の影響度を確認するため、①踏圧の大きい遊歩道部、②踏圧の中庸の広場部、③踏圧のほとんどない林縁部の3箇所を設定した。

- 計測では貫入が0.5以下のドタン層（旧地形の基盤：土丹）までを行った。ドタンまでの表土厚は①95センチ、②80センチ、③55センチであった。
- 計測の結果、土壌硬度は3点で明確な差異が計測された。
 - ①では広場から遊歩道部に移る狭さく部で利用者は必ず通行する場所である。S値0.7から1.0で樹木の根系発達に阻害のある非常に硬い状態であった。
 - ②の広場内は一部に柔らかな層があるもののほとんどが1.0から1.5の根系発達に多少障害のあるしまった状態であった。
 - ③の林縁部は、1.5から4.0で根系の発達にまったく阻害のない柔らかな状態で、根系の伸長に最適な硬度であった。
- まったくの自然状態であれば③の様な最適な状態で生育障害はないと思われるが、自然地としては遊歩道や広場は思いのほか締まっており、多少の障害はあると思われる。しかし、著しいものではないだろう。

今後の対策としては次の事が考えられる。

- ②⑦の枯枝は除去し事故防止をしなければならない。
- 枯枝切除あとの傷口癒合を促進するための切り跡削除が必要である。②⑦と同様に⑥も可能な限り削除すべきである。
- ④も近い将来枯死すると思われるので今後観察が必要である。
- サクラは根株の心材腐朽に弱いが、不定根などを使い回復する能力もあるため、自らの回復力を補助すべきである。
- 現状は活力があるが、枯死部の傷口から根株腐朽を進行させ強度を落す可能性があるため、やはり保護対策をはじめしておくべきである。
- 保護対策は、広場部の耕耘・土壌改良と立ち入り防止柵の設置が望まれる。現在は裸地だが、落ち葉が堆積しA0層を回復させるように、土壌の表面を落ち葉でマルチさせ、周辺に生育する植生（草本層）を回復させることが望まれる。
- 樹冠部では日照を確保するため他の樹木と被圧競争を行っている。同時に、地下部では根系の陣取り競争が行われているため、樹冠（根系）の範囲内の樹木は時々伐採し、オオシマザクラの優占度（優位性）を高めることも必要である。

広町緑地では、サクラ林の保全管理の手法は次のように考えているが、その応用形として「オオシマザクラ巨木」も保全する。特にここでは「オオシマザクラ巨木」の個体を保全することを目的としているため、競争相手にダメージを与えながら適度に生かし、生態系を維持した上で「オオシマザクラ巨木」に優占度（優位性）をあたえ、回復力を手助けする手法となろう。

根元の広場部はいったん踏み固められた場所であり、土壌の膨軟化対策をした後では、単に自然の回復というより意図的にキツネノカミソリなどの希少種の野草園にすることで、立ち入りを防止し根系の保全策とすることも考えられる。

以下、サクラ林の保全策。（平成16年8月 広町緑地報告書より抜粋）

- 「樹林の保全を目的とした場合（自然林へ移行）」は散策路際を除きほとんど現在の状況を放置管理することになる。
- 「樹林を複層林化し多様度を高める場合」は二次林の管理手法と同様に年1回から数年に1回の下草刈を行い林床の生育を抑える。またサクラが被圧されないように適度に枝切り法で成長した常緑高木を剪定する方法とする。
- 「林床の広場的な活用を図る場合」はサクラ以外の樹木は伐採し林床も年1回以上の刈り払いを行う。特にサクラの開花時にきれいにしておきたいが、冬期栄養成長するキツネノカミソリやホウチャクソウ・キンランなど早春の草花を維持できるように、落葉はそのままにしておきたいため、秋、落葉前に林床の刈り払い清掃を行う。
- 「樹勢が著しく落ちたり、腐朽で倒木の危険がある場合」は、苗木植栽により更新するが、基本的にはサクラが優先するように、障害となる他の高木を枝きり法で剪定する。

以上 文責：有賀一郎